

「姫え〜！」

声がした。岸の上から昨日の子ども達が清姫を呼んでいる。

「なんだ？三太……」

清姫は岩の上から、身体を起した……

「行き倒れだあ！来てくれ」

「わかった！すぐ行く」

言うなり清姫は、水の中に飛び込んだ。そして、水の中を滑るように岸まで泳ぐと、脱いであつた着物をつかんで駆け出す。走りながら、身に纏う……

あわてて、安珍もその後を追う……

滝尻王子の神殿の後ろに参詣道が続いている。その参詣道を、少し上った大きな岩の側の……大きなタブの木、その根元のタイミンタチバナの藪の中に、それはあつた……

わーんとハエが飛び、まわりに異様な臭いがしている。

安珍は、思わず怖気を覚えた。

「死んでいるのか……？」

「待って……確かめる。」

言うなり、清姫は、その物体の胸に顔をあてた……

「……息がある……」

「……この状態で生きている！……よけいに安珍は恐ろしくなった。

「三太！社殿まで行って、木槽と柄杓を借りて、水を汲んできて！」

清姫は、男の服を脱がした。

なんとという病気か……

男の身体は、全身、膿んで眼をそむけたくなるほど、ただれて変形している。

「次郎、小兵太……それから、正助も……サルトリイバラの葉を摘んで来て……なるべくたくさん……丸くて大きな奴！」

清姫はテキパキと指図を下す。

三太が、水を汲んで来る……

清姫は、安珍の腰にかかった手拭を奪うと、汲んで来てもらった水で濡らし、男の身体を拭いた。すぐに、手拭が真っ黒になる。

それを、また、水で洗い、しばって、何度も拭く。

「み……みず」

男の変形した唇が動いた……

清姫は、柄杓で水を飲まそうとするが、男には、飲むだけの力がないらしく、水が口から流れ出してしまふ……